

目的 19世紀アメリカ家政学前史において、ビーチャーは家政学の先駆者と位置づけられている。そうしたビーチャーの家政書のわが国への受容をめぐるには、まずその翻訳家政書による受容過程の解明が求められる。本研究では、明治前期にわが国で刊行されたビーチャーの原書による翻訳家政書の検討を通して、ビーチャーの家政書がわが国の家政教育・家政学研究に及ぼした影響について考察を行うことを目的とした。

方法 資料として海老名晋訳『家事要法』文部省、明治14(1881)年、石川米子訳『家事経済』文会舎、明治18(1885)年、瓜生寅『翻譯女子家政学』通信講学会、明治22(1889)年、C. E. Beecher & H. B. Stowe “*Principles of Domestic Science*” J. B. Ford & Co., (1870), Miss Beecher's *Housekeeper and Healthkeeper*, Harper & Brothers, (1876)他を用いた。

結果 1)ビーチャーの原書による翻訳家政書にはこれまで知られてきた『家事要法』、『通信教授 女子家政学』のほかに、石川米子訳『家事経済』があることがわかった。その原典は、Miss Beecher's *Housekeeper and Healthkeeper* である。これにより “*Principles*” 以外のビーチャーの原書がこの時期にわが国で翻訳されていたことになる。

2) “*Principles*” には32章構成の原書が確認された。したがって『家事要法』は原書の全訳と考えられる。3)『女子家政学』は『家事要法』と同一の原書 “*Principles*” の抄訳と推定され、日本の生活様式をふまえた記述が併記されている。